

大平正芳の政治姿勢

佐藤誠三郎

(慶応義塾大学教授)

はじめに

近代日本で、本格的な保守主義者であることは、容易ではない。第二次大戦後はとくにそうである。生活態度としての保守的態度、つまり特定の行動様式や生活様式を繰り返そうとする態度は、いつの時代にも、またどの社会にも広く見られるものである。カール・マンハイムはこれを、人間の本性に根差した「伝統主義」と呼んだ¹⁾。しかし思想としての保守主義は、フランス革命と産業革命を契機にして、つまり近代化の出発とともに生まれたものである。思想としての保守主義を生み出した直接的契機は、人間の理性と計画能力と徳性²⁾にたいする過大な信頼を基礎とする理想主義・急進主義の出現である。急進主義者は、フランス革命の指導者やマルクス主義者に典型的に示されるように、人間の完全性(パーフェクタビリティ)を信じ、理想社会の青写真を描き、その実現に向かって突き進もうとした。思想としての保守主義は、このような急進主義にたいする懐疑として出発したのである。保守主義者は、人間の不完全性を自覚し、理性や計画よりは、歴史によって鍛えられ、時間の経過に耐えて生き延びてきた、伝統の中にひそむ叡知を尊重し、環境の変化にたいしては漸進的・部分的に改善を積み重ねることによって、対応しようとする³⁾。

このような思想としての保守主義は、産業化の先発国であるイギリスで最も典型的に見られた。しかし、日本のような後発国、とりわけ先発欧米諸国と文化的伝統を著しく異にする後発国の場合、思想としての保守主義の成立はきわめて困難である。なぜならば、これらの非西洋後発国の場合、近代化の努力は、伝統を基本的に否定する形で行われなければならないからである。日本でも、戦前からいわゆる保守政党と急進政党（自由民権運動左派から社会主義政党までを含む）との対立は存在した。保守政党が現実主義的であり、急進政党が理想主義的であるという点も、欧米と基本的に共通していた。しかし、欧米を手本とし、欧米の制度文物を導入し、一刻も早く欧米に追いつかなければならない、そのためには日本の伝統的制度慣行を基本的に変えなければならない、という点では、保守政党も急進政党も本質的に同じであった。ただ急進政党がより純粹・非妥協的に欧米モデルを導入しようと主張したのにたいし、保守政党は現実の要請により柔軟に対応して、欧米モデルと日本の現状との無原則な折衷・妥協をいとわなかった。近代日本の知識人の間で、保守主義が「守旧」「無原則」といったイメージで捉えられ、それへの批判が支配的であったのは、決して偶然ではないのである。

第二次大戦の敗戦と、アメリカ占領軍の指導による改革に始まった戦後では、この傾向はいっそう強まった。敗戦は、単に軍事的敗北としてだけでなく、道徳的・価値的・文化的敗北として多くの国民に捉えられた。したがって、伝統への懐疑批判はいっそう強まったのである。戦後における保守政党と急進政党との対立は、東西冷戦を反映して、アメリカを中心とする西側体制に与するか、ソ連主導の東側共産主義体制を支持するかという形をとったが、伝統否定という点では両者とも戦前よりさらに顕著であった。その上、戦後の経済成長が国民の生活水準の向上をもたらし、また日米同盟が日本の安全を保障した結果、圧倒的多数の国民は伝統否定的な戦後改革（それは独立後若干の手直しを経たが）を支持するようになったのである。アメリカ占領軍が起草し、基本的に伝統否定的な憲法が、日本国民の間に定着したことは、

このような事態の推移をよく示している。したがって、戦後日本で思想としての保守主義を体现することは、きわめて困難だったのである。³⁾

大平正芳が戦後日本の政治家の中で、さらにいえば戦後日本の知識人一般の中で、とりわけ注目すべき存在であるのは、戦後日本の政治の中核で永く活躍しながら、彼がまさに例外ともいふべき本格的な保守主義者であった点にある。本章の課題は、大平正芳の保守主義の基本的特徴を分析し、その意義を明らかにすることにある。以下では、彼の保守思想を、一人間観と社会観、二政府と国民との関係、三政治手法の三つに分けて考察する。課題をこのように区分するのは、第一に、思想としての保守主義を問題とする以上、人間とその社会についての基本的考え方がまず検討されなければならないからである。また保守主義はなによりも政治に関わる心の構えであり、政治（とくに民主政治）は、治者ないし政府と被治者ないし国民との関係を主軸として展開されるからであり、そして第三に、政治運営の手法と政策実現のプロセスのなかに、保守主義の特質がとりわけ鮮明に現れるからである。なお大平正芳が、なぜそしてどのような経緯によって、例外的に本格的な保守主義者となりえたのかという問題は、きわめて興味のあるテーマであり、大平の思想を理解するうえで重要ではあるが、紙数と資料と私自身の能力および時間の制約により、ここでは省略する。また、大平正芳の思想の変化を時代とともにたどることも、ここでは行わない。それは大平の女婿であり、秘書官として長く彼に仕えた森田一が指摘するように、「学生時代から大蔵省の役人時代のかなり早い時期に（大平の）基本的な考えは固められた」と考えられるからである。⁴⁾大平は若い時から晩年まで、自ら筆をとって含蓄のある優れた文章を、多く書き記した。たくまざるユーモアを湛えた濃厚・透徹したその文章自体が、成熟した保守主義者としての大平正芳の面目を見事に示している。本章で、大平の文章や発言を多く引用したのは、大平をして大平正芳を語らせるのが、彼の保守主義とそれに基づく政治姿勢を理解するのに、最適の方法であると信ずるからである。

一 人間観と社会観

人間は基本的に不完全なものであるというのが、大平正芳の人間観の基礎となっていた。「大体人間というものは程完全でないもの、欠点の多いものはない。神様はよくも、このように欠点の多い人間を、とりどりに創造したものだと驚くのである」⁵、「人間というのは、そんなに立派な存在ではありません」⁶といった発言を、大平は繰り返し行っている。したがって、不完全な人間によって構成される人間社会が、理想状態に達するなどということは、大平には考えられなかった。「もともと世界は、われわれを満足させるようには構成されていないようです。世界は特にわれわれに悪意も好意ももってないようです。問題はわれわれがこの世界をどうするかということであり、世界は受け身の形でそれを見守っているようです。永い人類の歴史を通して、われわれの先人は、いつの時代においても苦悩と苦闘を重ねてきたのです。何度も何度もその改革を試みては失敗してきたのです。たまたま改革ができたと思つて喜んだ瞬間、また新たな苦悩ができ、みんなが幻滅に泣いたのです。われわれは、こういった苦悩の深淵にいつも生きておつたし、今後もそれから脱却することはできないと観念するより他に道はないようです」⁷。「本来、歴史というものは……」最終的解決なるものはないのであつて、暫定的解決を無限に続けていくのが歴史だと思つてあります⁸。「このような大平にとつて、理想社会の実現をめざす社会主義や革命理論は、「貧血した」思想であり、「思い上がり」もはなはだしいということになる⁹。ここに現されている大平の人間観・社会観は、まさに思想としての保守主義の神髄を示すものである。

大平の場合、しかし面白いのは、人間の不完全性をむしろ積極的に捉えていることである。大平はいう。「聖書によれば、神様は、人間を自己の姿に形どつて創造したとある。神様はつまりその愛惜する唯一の子として人間を創造されたのだ。如何様にも創り方があつた筈なのにその無限の可能性の中から、態々今

日われわれがまのあたりに見るような姿に人間を創造されたのだから面白い。神様はその唯一無二の傑作として人間を創造し、人間の歴史を創出されたわけだ。それ程神様が目をかけている人間は、謂わば、欠点だらけというわけである。しかし私は、どうも神様の秘義が、この欠点の中に隠されているように思われてならない。若しも人間が、完全かまたは完全に近く創られていたならば、一体この世の中はどんな姿になるであろうか。恐らくそれは驚く程退屈な世の中であるに違いない。(……)世の中は火の消えたように退屈で、無聊を凌ぐのに困ってくる。土台、完全といい、円満具足というような言葉自体が消え去ってくる。倫理というものがなくなるのである。人間はその技能を磨き、品性を陶冶する必要がなくなってくる。それでは全くたまったものではない。欠点というものは、そのように歴史の原動力であるわけだ^⑩。人間の愚かさや欠陥を鋭く透視していたが故に、大平は人間に深い愛着と尽きせぬ関心とを抱いていたのである。

人間の欠点が歴史を動かすのであれば、歴史の変化は進歩や定向進化とはおよそ程遠いものであろう。「世界は特にわれわれに悪意も好意ももっていない」「歴史は、もともと盲目である」^⑪、しかし人間が不完全であるからこそ人格的向上が可能であり必要でもあるのと同様、歴史が特定の方向に進歩発展する保障がないが故にこそ、人間の努力が重要なのだ、というのが大平の基本的な歴史観であった。大平は語る。「人間は強くないし、愚かでもある。そういう諦観がありますな、私には。しかし、そこでとどまってはいかんわけで、いずれ枯れる朝顔でも毎日水をやるでしょ。そういう気持ちを大事にしたい」^⑫。「フォルトナア(運命)」「ネチエシタ(合理的手段)」「および」「ヴァイルテユ(徳)」「というマキアベリーの三つの基本観を引用して、大平は次のように述べている。「われわれはわれわれを廻る非合理的な運命に挑戦することはできない。その氾濫を防ぐためにせいせい堤防を築き治水工事を施すことができるに止るのであって、その流れをせき止めてしまつなどというとは思ひも及ばぬことである。その動きの真髄を諦視すること

ができればこれに対する合理的処置が明らかになり、これを遂行することよつてのみ、人間は最高の徳を実現するに至るのである。つまり彼（マキアベリー）の言わんとするところは、直線的にいきなり最高の徳の具現を仰望してもそれは人間の世界においては不可能事であつて、われわれは人間の世界に非合理なおおいかぶさつてゐる運命の重圧を思い併せなければ、最高の徳に至る合理的手段がでてこないのだといふのである。マキアベリーにおける権謀術数と力の支配は、今述べたようにつねにその反面における運命の氾濫を防ぎとめるための死闘を意味すると解してはじめて、マキアベリスムの真骨頂が理解される¹³。大平にとつて、歴史とは、その形成の動因に即すれば、人間の理解を超えた運命と人間との格闘のドラマだったのである。

言葉を換えていえば、運命とは過去から続く引力であり、人間の努力は未来を切り開く力である。若き日から愛読した田辺元の『歴史的现实』に即して、大平は次のように述べている。「先生（田辺元）によると時間というのは、いつも現在であつて、その永遠の現在こそは、常に未来を志向する力と過去に執着する引力との二つの相反した方向に働く力の緊張した相剋とバランスの中にある（……）現在こそはわれわれにとつて、無限の選択の可能性の中で選ばれた唯一のものであり、かけがえないものである。したがつてわれわれは、この現在に真剣に取り組む以外に生きる手だてはない。しかもその現在は、未来と過去との相反した方向に働く力の相剋の上にあるのだから、過去のな引力を無視して未来をのみ志向することは、いわゆる革命となり、未来に目を蔽い、過去にのみ執着することは、いわゆる反動となる¹⁴」。ここには、過去を無視する急進主義と、未来を拒絶する反動主義への、保守主義の立場による明確な批判がある。田辺元がこの本でいった「永遠の今」は、大平が終生最も好んだ言葉の一つであつた。

人間の不完全性を深く自覚しており、それ故にあるがままの人間に愛着を抱いていた大平は、一見問題があるような他者の行動についても、バランスの取れた判断を行い、その時々々の支配的価値判断に追隨し

て一刀兩断的に否定しざることはなかった。揮毫を頼まれた時、大平がよく書いた言葉に「不責人小過（人の小過を責めず）不恕人旧惡（人の旧惡を思わす）」というのがあったが、性惡説を前提とするゆえに、大平は他者にたいして寛容であつたのである。

芦田内閣が成立した時、矢野庄太郎大蔵大臣が、初登庁の日に大蔵省職員に訓示して、「ともすれば諸君は役所の白紙で鼻をかまれる場合がありますね。若しその紙が白い紙で而も役所の紙でなくて、自分の紙であつたとしたならば、果してその紙で鼻をかむかどうか考え直してもらいたい」と述べたのにたいし、大平は「なかなか味のある訓示」といいながらも、「聞いていた若い役人衆にどれほどの共感をかち得たかは判らない」と批判し、次のように述べている。「もともと人間は自分の物は大切にするものである。学校の机とか椅子とかは粗末にするが、自分の机や椅子は大事にする。公園の樹木は平気で切り倒すけれど、自分の家の庭木は大事にするものである。それは確かに悪いことには違いない。然し人間というものは、もともとそのように不都合に出来上がっている訳だ。お金についても同様のことが言える。自分の金は大事にするが、公の金は案外粗末にするものである。国のお金とか、公共団体のお金とか、会社のお金とかいうようなものは浪費され勝ちなものである。これも悪い事には違いないが、我々が日常経験する嚴然たる事実である。この事を頭に入れずにおいては、財政というものをまともに考える事は出来ない¹⁶」。人間の不完全性、さらにいえば性惡説を前提にしなければ、まともな政治や行政は行えないというのが、大平の確信であつた。遼の名宰相耶律楚材の「一利を興すは一害を除くに如かず。一事を生（ふ）やすは一事をへらすにしかず」という言葉を、若い日から大平は行政・政治の基本的格率としてきたが、それはまさにこのような人間性にたいする透徹した理解によるものであつた。

戦時中、興亜院蒙疆連絡部經濟課主任として張家口に赴任し、軍人の横暴にたいし強い批判の念を抱いた大平は、しかし戦後、流行となつた反軍的潮流にたいしても同調せず、戦争の記憶のまだ生々しい一九

五三年に次のように述べている。「軍人にも学ぶべきところが多くあった。物事の判断が、役人や商人の場合には、どうしても専門に捉われ勝ちであるが、軍人の判断には、専門家に見られない全局的判断が間々見られた。又だから小田原評定をするということが軍人は嫌いで、どの問題についても、必ず一つの『判決』(彼等は書類の最後の結論にこうという言葉を使った)を求めた。又人格的にも玉のように澄み切ったいい人があった。終戦後の反動として一概に軍人を悪くいうのには、私はくみし難いのである」⁽¹⁶⁾。

また香川の中農の家に生まれた大平は、地主が、肥料商・金融業も事実上兼ねて、一般農民を支配・収奪している状態にたいして、強い批判・反撥を子供の時から抱いていた。しかし彼は、同時に、地主が地域の発展に積極的な役割を果たしてきたことも、決して見落とさなかった。大平はいう。「尤もかような地主を一概に非難するのは当たらない。地主金融の方式は、当時の農村にとっては、かけ替のない金融方式であったし、地主の中には本当に親切な人々もいた。彼らは恩情を傾けて、輩下の百姓衆がそのなりわいを維持して行けるように、こまこまとした配慮を怠らないで、慈父のように敬慕されている方も少くはなかった。そして又その地主の家族も謙遜であり質素であつて、自ら率先して勤儉貯蓄の先達になっていた人も多かった。水害が起きて、池塘や、田地が流された場合においては、政府の力を俟つまでもなく、地主自ら相当の復旧費を支出してくれたりした。(……)地主の没落ととも、土木事業の一切の責任は中央地方の政府の責任になってきたし、地元においてもそれを当然だと考えるようになってきた。ところが川や道路がこわれて困るのは役人ではなく地元の人々である。又川や道路や用水路の復旧に一番熱意を持つのも役人衆ではなく地元の人々である。そうだとすればその人達が、たびたびの陳情によつてちよつぱり予算の分け前にありつき、役人衆の悠長な工事ぶりを傍観する姿は決して本来の在り方ではない様に思われる。私はこの頃になって、しみじみと地主の功罪を考えさせられるのである」⁽¹⁷⁾。

このような保守主義者大平正芳にとつて最大の思想的問題は、保持すべき日本の伝統の乏しさであつた。

日本の政治家としては、例外的に読書家であった大平は、多忙をきわめた生活の中でも、毎週のように本屋に立ち寄り、「新刊書の新鮮な香りと、それを手にした柔らかい触覚」をこよなく愛した。大平は、政治や経済の現状分析についての文献よりは、哲学書や歴史書、とりわけ「歴史の風雪に耐えて、しかし依然強い光彩と生命力を放つ」……「珠玉のような古典」を愛読した。このような読書態度にも、人間のさかしらな構想や計画には疑念と不信を持ちながらも、歴史の中で蓄積され、磨かれてきた伝統の叡知にたいしては、深い敬意を払うという保守主義の精髓が表れている。しかし大平は、日本の伝統の底の浅さに慨嘆せざるをえなかった。大平は語っている。「日本人の本よりは、どうしたものか、訳本の方が読み応えのする本が多いように思う。構想の壮大さ、方法論の雄渾さ、引例の豊富さ、タッチの勢い等において、西欧物の方がすぐれているものが多いように思われてならない。そしてそれは、欧米人が自ら築きあげた欧米文明に誇りと自信をもっているせいではないかと考えられる。中国の古典も、欧米のそれとは全く異質のものではあるが、それ自体われわれの肺肝をうつ力をもっている。そこには欧米人の思想の紹介もなければ受売りもない。中国人固有の思想が大胆に吐露されて、迫真の魅力をもっている。それらに比して日本人のものには、この東西両文明の流れのいずれかに沿って、よくいえばその忠実な紹介、悪くいえばその模倣という域を、未だ十分には抜け出ていない憾みがある。つまり、みずからの文化に対する誇りと自信に乏しいからであろう。その（西欧と中国の）いずれにも決めきれず、ユニークなみずからの姿も発見しきれず、東西の間に無闇に彷徨しながら老いてゆきつつあるのが、多くの日本人の姿ではないか（……）われわれ日本人の精神の渴きは（……）いつこうに癒されることもなく、みずからの思想と生活の投錨点をどこに見出すべきかも決めきれず、依然として彷徨と苦悶を重ねている有様である。真に日本的なもの、われわれが誇りと自信を持ち得る固有な日本思想は、いったい何かという課題は、政治においても、経済においても、さらにはより深く文化の世界においても、発掘され確立されていない現況である。この

苦悶は日本人に根深い焦燥心をかり立てていると見えて、日本ほど刊行物の多い国はない。新刊書籍はまさに汗牛充棟、応接にいとまがないほどである。自然日本人は乱刊乱売乱読となる。その後に沈澱するものは、大いなる誇りでもなければ自信でもなく、また満足でもない。虚ろな精神の渴きだけが、いつまでも残るという始末である¹⁸⁾。

「歴史のない民族には未来がない¹⁹⁾」と確信する保守主義者大平にとって、近代日本のこのような現状は、深刻な問題であった。そして冒頭に述べた事情により事態がいつそう悪化した戦後の日本の実態は、大平にとつてとりわけ重大であった。大平はいう。「戦後におけるわが国の政治状況はまことに奇妙な状況にあるといえよう。それは大胆にいつてしまえば、国の進路の喪失ともいふべき事態である。太平洋戦争まで永い間日本の国と社会を支えていた秩序と倫理の体系は、敗戦を機としてもろくも崩壊してしまつたかに見えた。それだけではなく、これらの旧秩序と旧倫理は日本を戦争に導いた悪だということにされてしまった。しかもこれらに代わるべき新しい倫理と秩序が生まれたかといえ、そうではない。このことが戦後の日本を一層混乱に追い込んだといわなければなるまい²⁰⁾」。

しかし大平は、ただ慨嘆し、絶望していたわけではない。日本の現状にたいし前述のような批判的・悲観的判断を抱きながらも、「日本人はそんなお粗末な民族じゃない²¹⁾」と大平は信じていた。その根拠は、何よりもまず、すぐれた日本人が事実として存在することであった。尊敬する先輩知人を讀める感動的な文章を、大平は数多く残しているが、このような少なからざる数のすぐれた日本人が事実として存在し、その知己を得たことは、大平の日本にたいする基本的な信頼感を支える第一の基礎になつていたものと思われる。また大平は、自分の生まれ育つた故郷をこよなく愛し、伝統社会に生きる慣習や行事に深い愛着を持っていた。当時の農民生活の厳しさを語りながら、同時に大平は「農民にはそれ相應の楽しみがあった。少年時代の私にも数々の甘美な思い出がある。そしてその多くは、祭日や休日と結びついてい

る。(……) それぞれの祭りには、それぞれの個性があった」とと懐かしく回顧している。个性的で伝統に深く根差した日本の祭りと比較して、一九五一年に初めてアメリカを訪れた際に見出したアメリカ人のレジャーの過ごし方は、大平にとって余りに単調に思われた。大平は次のように指摘している。「私は、先年(一九五一年)、アメリカ各地を旅行して、アメリカ人の生活がいかに単調なのに驚きもし、その単調な生活に耐えられるアメリカ人の神経の太さに敬服もした覚えがある。アメリカ人の生活というのはたとえば『活字』のようなものである。月、火、水、木、金の五日は一生懸命に働いて、土、日の二日は大いに享樂する(……)しかしその享樂の仕方が、映画や演劇、ドライブその他であつてはたからみても、与えられた一定の時間を、どうして有効に経済的に享樂するかということが主眼になつてい(る)」。これにたいして、日本人の享樂の仕方は多様であり、「これを文字にたとえれば、不規則に書きなぐつた『肉筆』の字のようなものだ²³」。当時アメリカを訪れた日本人は、比較を絶して豊かで自由なアメリカの生活に圧倒されるのが通例であつたのに比べて、大平の反応はこのようにきわめて個性的だつたのである。その最初のアメリカ旅行で、はじめてワシントンを訪れた大平は、この人工的な都市について、「(ワシントンは) 明るい美しい街だが、どうしたのかこの街は単調でこまやかな潤いというものが乏しい。日本の街が肉筆の字にたとえられるとするとこの街は正に活字にたとえられよう。概してアメリカの文化はこの首都の相貌が象徴しているように、能率と衛生という二つの筋金で貫かれていて、いわゆる『こく』とか『さび』というような屬性に乏しい²⁴」とその感想を記している。ここには、敗戦にうちひしがれた貧しい日本が、なお保持してきた文化の蓄積にたいする、大平の深い自信が示されている。

日本にたいする大平の希望の第三の根拠は、敗戦の打撃から見事に回復した日本民族の活力である。「もはや戦後ではない」といわれた一九五五年に、大平は故郷の高等学校で「祖国に誇りを持って」と題して講演をし、高校生たちに次のように訴えている。「私は諸君に、われわれの先祖の嘗々たる勤勉と努力

によつて、敗れたりと雖もわが国が依然世界の一等国の列に列する資格を保有していることに感恩の念を新たにすると共に、わが国にたいする大きい誇りと自信を強められるよう希望してやまないのであります。昭和二十年八月十五日、わが国は太平洋戦争に敗戦を喫しました。陸海軍は壊滅し、都市は大部分焼け、多くの同胞は死に、食糧その他の必需品は窮乏し、国民生活はメチャメチャになりました。その当時、十年たつと日本は今日のように復興すると予想した人は恐らくは一人もなかつたろうと思います。それが、今日までのあたりに見る日本は戦前以上によくなりました。(……) 戦争は多くの物的設備を焼却し滅失せしめました。しかし、日本人の精神と頭脳は、結局、これを焼き尽くすことができなかつたのであります⁽²⁵⁾。近代日本の文化状況の貧困さにたいし、すでに述べたように痛切な自覚と批判の目を持っていた大平は、しかし日本文化の将来の発展について、次のように樂觀的な見通しを述べている。「日本人みずからの生活にとけ込み、これを規律し、これを鼓舞する思想は、その源流が洋の東西いずれであるうとも、日本人の血となり、やがてそれが成長して、日本人みずからの壮大な思想と生活と文化を生む契機になるのではなからうか⁽²⁶⁾」。保持すべき伝統を自国の過去に見出しえなかつた保守主義者大平正芳は、それを外国と未來に、つまり外国文化を血肉化しうる日本人の能力に、求めることによつて、精神の安定を保とうとしていたのであるう。そこに矛盾を指摘することは易しい。しかし大平がこのような未確定で、はかなく、根拠にとほしいものに希望を求めざるをえなかつたという事實は、近代日本において、眞の保守主義者であることがいかに難しいかを、端的に示すものに他ならなかつたのである。

二 政府と国民

保守主義思想を体現していた大平正芳にとつて、国家や政府の必要性は自明であつた。東京商大(一橋大)における大平の卒業論文のテーマは、同業組合論であり、したがつてすでに学生時代に、私有財産制

度に基づく市場経済の欠陥について、大平は鋭い問題意識を持つていたのである。当時実業界に進むのが通例であった東京商大出身者としてはむしろ例外的に、大平が行政官試験（公務員試験）を受験・合格し、そして大蔵省に就職したのは、同郷の津島寿一次官の影響や推挽のみによるものでは、決つてなかつたであらう。その大蔵省を辞して政治家になることを決意したときの心境に関連して、大平は次のように述べている。「政治という職業は人間社会における最も本源的なものである。人間は政治的動物だと言われている。凡てのこの始めに政治があり、凡ての社会的営為を貫いて政治があるのである。従つて又政治家という公職はなければならぬし、誰かがこれをお引き受けしてやつて行かなければならないことも判りきつたことである」⁽²⁷⁾。

しかし、政府と国民、権力と自由との間に適切な緊張関係とバランスが保たれていなければならないと、大平は若いときから考えていた。大蔵省入省の一年三カ月後に横浜税務署長となつた大平は、署員にたいする訓示の中で、次のように述べている。「行政には、楕円形のように二つの中心があつて、その二つの中心が均衡を保ちつつ緊張した関係にある場合に、その行政は立派な行政と言える。例えば（……）支那事変の勃発と共にすべり出した統制経済も統制が一つの中心、他の中心は自由というもので、統制と自由とが緊張した均衡関係に在る場合に、はじめて統制経済はうまく行くのであつて、その何れに傾いてもいけない。税務の仕事もそうであつて、一方の中心は課税高権であり、他の中心は納税者である。権力万能の課税も、納税者に妥協しがちな課税も共にいけないので、何れにも傾かない中正の立場を貫く事が情理にかなつた課税のやり方である」⁽²⁸⁾。

このような権力行使に関する控え目な判断は、一方では庶民の感情・行動様式にたいする大平の暖かい同情に基づくものであり、他方では人間の本質的不完全性にたいする深い自覚によるものであつた。横浜税務署長から仙台税務監督局間税部長に転動した大平は、財政確保の要請と民衆の利益との相剋に直面せ

ざるをえなかった。当時東北ではさかんに酒の（とりわけどぶろくの）密造が行われていたが、産業が未発達であった当時の東北地方では、酒税が間接税の主要部分を占めており、税収確保の立場からは、密造の摘発に乗り出さざるをえなかった。大平によれば、「密造の検査は、大抵人々がまだ目覚めぬ未明に目的地に行つて、一集団の官吏が、一軒一軒しらみつぶしに張り込むのが普通のやり口であった。一人一人が必ず鉄の杖を持っていて、野菜畑でも、何処でもこれをさし込んで、かめのありかを探つたものである。（……）つかまれば、型通りに聴取書をとられ、捺印させられて、少くない罰金を課せられるが、重いになると体刑に処せられる場合もある。そのために子牛を売るのはよいとしても、可愛い娘を売るといふ哀話も時折耳にしたし、働き盛りの男に刑務所に這入られては、一家の糊口をしのごくに困るといふので、老人をわざわざ犯人に仕立てるといふ悲劇も生んだのである」²⁹。晩年になつても大平は、そのときの辛い気持ちを「時折、その現場に立ち合つた私は、『権力』と『民草』、『治者』と『被治者』の悲しいかわりあいについて、何かしら割り切れない、やりばのない気持ちに沈んだものである」³⁰と回想している。権力による取り締まりを可能なかぎり避けようと考へた大平は、啓蒙・教育活動を通じて密造を減らそうと努力した。そのような努力がどの程度の効果を挙げたかは分からないが、大平の次の発言は権力行使は控え目であればならないという大平の若い日からの信念を如実に示している。「誰も進んで国法を犯そうとする者はいない。已むに已まれぬ事情があるからに違いない。而して犯罪をどう矯正し予防するかの道は、官憲の威圧というてつとり早い力に依存するよりは、矢張り根本において、手近かなところから辛棒強く教育してかかる方が、速効はないが地道な実効的方法であらうと思つ」³¹。

後に東京財務局の間税部長となつたとき、上司の池田勇人が「君は税法を本格的に勉強していない。自分が局長（東京財務局長）に在任中、みっちり仕込んでやるから、その積りで」といったのにたいし、大平は言下に「御意は有難いと思いますが、そのことだけは御断り申し上げます。私には練達堪能で税法に

精通した部下が沢山いますから、税法上の疑義は私の部下と御相談を願いたい。私は税法に精通していませんが、生きた行政は決して法律の条文の中からは生れてこないと思います。私の常識で、捉われない間税行政を一つやってみたいと思います」と答えたといふ。³²この発言は、おそらく仙台における痛切な体験を踏まえて行われたものである。後に池田大蔵大臣の秘書官となった大平にたいし、池田は「君は政治家になつてはいけない。君のような型の人物は官界に乏しいのだから、自分としては君が大蔵省に残つてくれることを希望する。絶対に政界進出などを考えてはいけない」と語つたといふ。³³この逸話は、大平の考え方や行動が、いかに通常の行政官と異なつていたかを示すものであり、また池田がそれを鋭く見抜き、高く評価していたことを語っている。もっとも、まさに同じ理由から、後に池田自身が大平の政界進出を強く勧めることになるのだが。

明らかに反社会的ないし非道徳的と思われるような行動にたいしても、それが政府の間違った政策にたいする人々の自衛手段という側面をしばしば持つことを、大平は見逃さなかつた。たとえば会社や政府のお金を私的利益のために使う、いわゆる「社用族」や「公用族」にたいし、大平は「自分の力で現在享受している生活を営む力がないのに、会社とか役所とか組合とかにぶらさがつてその分を越えた生活を享受している」「人種であり、「自己責任」の意識に欠けていると批判する一方、道徳的批判だけでは社用族や公用族の追放はできるものではないとして、次のように述べている。「人間である以上、誰もすきこのんで社用族や公用族になり下り下りたい者はないのである。社会人としてそれ相当の責任と体面が維持できる場合には、そういう人種になりたくないのが人情であろう。そこで私は、会社でも役所でも、第一に給与を出来る丈多くするように心懸けなければいけないと思ふ。そうしておけば社用族、公用族の追放に抜本的な手を打つてもこれは大方の納得が得られると思ふ。給与を増すために、公私を問わず各団体は、蛮勇を奮つてその財政の刷新を図るべきだ。給料を出す事を損失だと思ふのは野暮な話だ。給料を増すことによ

つて会社や役所に仕事の渋滞がない許りが、責任感の弛緩を回避出来ることになるわけである。そして又、その勇断から日本の民主主義は生々と発展する素地が造られるし、日本の財政の刷新を招来することが出来るものと確信する。又税金を出来るだけ減らさなければならぬ。かせいでもかせいでも税金にもって行かれるようでは社用族や公用族はどうしても生れる。減税がこの種の害悪追放の一大要件であることも銘記すべきである」⁽³⁴⁾。

政府や会社の金が浪費されがちであるのは、単に給料が安いとか税金が高いとかによるだけではなく、人間の本質的屬性（性悪説）によるものであるということをも、すでに紹介したように大平は深く自覚していた。したがって彼にとつて、財政とは「浪費され易い公の金をどのように有効に使うか」という事にならなかつた。市場経済における自由競争を手放しでは容認しなかつた大平は、しかし同時に、政府による経済活動への介入、とりわけ企業の国有化・「社会化」にたいしても、きわめて慎重であつた。一九五〇年代初頭という早い時期に、すでに大平は、イギリス労働党政府の社会化政策が、イギリス経済の活力を奪つているという事実に着目して、次のように述べている。「私に言わしむれば今頃社会化の必要を説く事が最も進歩的であるとしている人々に対しては、物事をそう公式的に割り切つたり生硬に取扱つたりしないで、もっとねりにねつてももらいたいと言つことである。」……「社会化は国民の活力を阻むものであつてはいけない。遊んでいても喰える、病氣になつた責任も回避できるという事になれば、これは確かに天国に違いないが、然しそれ又在国民の活力と自己責任感が減退する事になる」。大平はすでに当時、「これからの政治は」……「安い政府をどうして作り上げるか」という事がその悲願であらねばならぬ⁽³⁷⁾と喝破していたのである。

権力は控え目に行使されるべきであり、財政規模は可能なかぎり圧縮すべきであると信じていた大平は、しかし行政機構や公務員制度を手軽に改革しようとする態度には、強く批判的であつた。その理由は、大

臣と官僚との力関係、および自己の利益を保全しようとする人間の基本的特性からして、善意の改革努力はしばしば公務員制度の肥大化や財政の膨張を招いてしまうという、冷静な判断にあった。自分の役人および政治家としての体験を踏まえて、大平は、大臣は「役所の主人公であつて主人公ではない」と主張する。その理由は、「ずっとその役所に所属し、そこに生涯の浮沈と運命を託しているのは、その役所にいる役人衆であつて大臣ではない。主人公たる大臣は栄光をになつて登場してくるが、やがては、その役所を去つて行く存在である。大臣は主人公たる虚名をもつてはいるが、事實はその役所の仮客にすぎない」からである。「したがつて大臣はその在職中、なるべく部下に憎まれずにやりたい。できれば物判りのよい大臣として、役人衆に親しまれたくなるに決まつている。もつと進んでその役所の権限や予算、さらにはその定員を増やすことによつて、『政治力のある大臣』として高い評価を受けたいという野心をもつとして、少しも不思議はない」ということになる。性悪説に立脚する大平は、きわめて率直に述べている。「そんな大臣では天下の大事を託するに足らない、などといつて悲憤慷慨してみてもはじまらない。大臣もまた平凡な人間であるからだ。役人衆は公僕なのだから、国民の利益のために大臣の命令のままに随順すべきであつて、時の政府の大方針を曲げたり、阻んだりするのはいけないといきまいてみてもはじまらない。自分の名譽と生涯の運命を賭けた役所の存亡に、役人衆が無関心であるはずがないからである。役人衆もまた平凡な人間であるからだ」³⁸。

ではどうするか。ここで彼は、すでに述べた「一利を興すは一害を除くに如かず」という格率に従うことを提案する。大平はいう。「除くべき一害は（……）大臣室の机の上に無数にころがっている」のだから、それを一つ一つ除いていくことに努力すべきであつて、「国民のために百利を興すべく発心して努力してみても、その結果はほとんど例外なく、役所の権限と予算の増加を来すことはあつても、国民の生活に資するところは乏しく、ひよつとすると国民の生活に余計な制約と負担を来すことになりかねない」³⁹。

人間の計画能力や環境制御能力を過信することを強く批判していた大平にとって、「一拳によりよい状態を求め」るのは「賢明な生き方」ではありえなかった。大平は主張する。「先ずわれわれは、現在に不満であつても、現在より悪い状態があり得ることも考えておかねばならないと思います。現在より事態を悪くしないためにどうすればよいかを考える方が真面目な生き方であり、そのために先ず努力することが大切であると思います。そうした用意をしておいて、次によりよい状態を構想し、それに達するための手段を選択按配するのが順序であると思います。その場合注意しなければならぬことはいかなる手段にも必ずプラスとマイナスが伴うもので、絶対的にプラスである手段などというものはないということです。現実にはよりプラスの多い、よりマイナスの少ない手段を工夫することであると思います。革命というものはプラスばかりを期待すればこそ、青年の心を奮い立たせるものですが、その結果はプラスよりもむしろマイナスが多かったことを歴史は教えておると思います⁴⁰。これはまさに思想としての保守主義の精髓である。安易な改革に批判的だった保守主義者大平は、しかし決して無為に安住することを勧めていたわけではないのである。

権力の自己抑制をこのように強調した大平は、他方、国民にたいしてもその自覚と自己責任を厳しく要求することを忘れなかった。民主主義は「緊張した自己責任感の溢れる」健全な個人の存在を前提していると確信していた大平は⁴¹、政治は政治家のみが行うものではなく、「全国民が、政治家も含めて、それぞれの立場においてそれぞれ得意とする楽器を手にして参加するコーラスのようなものである」と考えていた⁴²。したがって、一方では政府の指示に「唯々諾々」とついていくような国民は、大したことをなし遂げられ⁴³ず、「政府に不満をもち、政府に抵抗もする民族であつて、はじめて本当に政府と一緒に苦勞して次の時代をつくれる」のだと考えると同時に、他方、有権者からの一方的な政治家批判にたいしては、強く反発した。石原慎太郎の当選祝賀会に出席した大平は、財界人が口々に「大平さんには悪いけれど、自民

党はもつともつとしっかりしてもらわなければならない。何といても政治が一番おくられている」といった発言をするのにたいし、次のように明確に反論した。「先程からお話を聞いておって、私の胸中にある種の抵抗が湧いてくるのを抑えきれない思いです。英国に『よき新聞あるところによき政治がある』という諺があります。しかし私をして敢えていわしむれば、『よき国民あるところによき政治がある』のだと思います。石原君は政治は万人のものであるといっております。これは凡ての人が政治に参加すべきであるという意味だと思えます。しかし、私は凡ての人が現に政治に参加しておると思えます。(……) 皆様もまた実業人という立場で、現に政治を实践されておられると思えます。一つ一つの家庭や企業の在り方が、そのままその国の政治のよし悪しを決めるものであります。それら一つ一つが立派にならなければ日本と日本の政治は立派にならないからです。(……) だから政治家に対する自分達の理解は果たして十分か、政治家のやり口をその立場に立って考えてみることを怠つてはいないか、政治家に対する協力に欠けるところがないか等について考えて頂きたいと思っております。そして皆様もそれぞれの立場で、政治に参加し、政治を实践しておるのだと思ひ直していただきたいのです。⁴⁴これは手軽で無責任な政治家批判にたいする、ほとんど非日本的なまでに率直・明快な反論といえよう。

権力行使について控え目であることを望み、また国民の自己責任を強調した大平は、社会の巨大化について一基本的に不信心と危惧の念をもっていた。総理大臣在任中、大平が首相執務室に持ち込んでいた座右のノートには、読書遍歴の中で遭遇し、感動した文言が書き抜かれていた。その中にレオポルド・コールの『居酒屋社会の経済学』からの次のような引用が含まれていた。「政治の任務は社会規模を臨界状況からそれ以下のものに縮小することである。即ち地域の分割、非中央集権化、地方分権化を進めることである。政治や経済のシステムを変えることではなく、社会の規模を人の背だけに合うように縮小させることである」⁴⁵「犯罪件数は人口規模に比例してくる。一たん、社会が臨界規模に達してしまえばいかなる行

政措置、良心の呼びかけ、教育の改善を行っても、犯罪件数の低下は期待できない。慎重な大平は、公言することは避けたが、府県は自治体としては規模が大きすぎると考えており、現行の府県を廃止し、江戸時代の藩程度の規模に縮小すべきであるという「廃県置藩」を持論にしていた。⁴⁶ また大平は、都市化の一方的な進行にたいして、強い危惧の念を抱き、都市の自由と田舎の親密な人間関係を組み合わせた「田園都市」の建設を夢見ていた。⁴⁷ これも社会規模の縮小化による人間性の回復と民主政の活性化を、企図したものに他ならなかったのである。

三 政治手法

人間は基本的に不完全なものであり、理想社会などというものは存在せず、また望ましくもない、そしていいことづくめの政策などありえないと考えていた大平にとって、政治的対立が存在することは当然であり、むしろ肯定的に評価すべきものであった。保守合同により自民党が成立しようとしていた一九五五年一〇月に、大平は「はげしい政争は、内乱に代るものという限りにおいて、歓迎すべきものである。反対党は予備的政府であり、『国民の政府』に配する『国民の反対党』である。強力な政権は、強い反対党によって、腐敗から免れるのである」と述べている。⁴⁸

しかし大平は、当時の保守対立を民主主義にとって好ましい政党間の競争とは考えていなかった。それは東西対立を反映して、保守の対立が原理的なものとなっており、建設的な論争や妥協が不可能になっていたからである。大平は、保守対立の不毛さを次のように慨嘆している。「国会の真剣なる論議を通して保守と革新が互に歩みよって一つの国策を打ち出そうなどということとは全く一片の夢であって、双方共、はじめから相手の提案については、絶対反対の態度が措置されている。国会は話合いと妥協の場ではなくて、闘争の巷と化してしまっている。この有様では、本来の議会民主主義の実践などということとは到底覚

束ない相談であつて、いわば、保守と革新は一階と二階で、虚空に向つて互にシコを踏んでいる相手なしの相撲のような恰好を呈している。お互は通約がきく分母をもっていない（……）唯僅かに多数決の原理なるものが、議会という円周の切点において、かすかす双方の一時的休戦を宣しているに過ぎない状況である。⁴⁹」

このような状況に直面して、大平が採用した政治手法は、一方で保守・革新の接点を可能なかぎり多くし、両者に共通する土俵を少しでも広く設定するよう努めることであつた。大平が、池田内閣の官房長官として「寛容と忍耐」を掲げ、安保改定をめぐつてきわめて激化した保革対立の緩和に努力したことはよく知られている。また与野党伯仲状態のもとで内閣を組織したとき、中道政党との政策ごとの協調、いわゆる「部分連合」を主唱したのも、同様な態度の現れである。すでに触れた座右のノートには、出所は不明であるが、「見落とす、手を引く、話をそらす 紛争の回避策はこれだ。むきになるものではない」という文言が記されていた。⁵⁰ 政治に百点満点を求めてはいけない、「やはり六十点とか六十五点とかをとれば、まずまずじゃないかと思う⁵¹」という大平の有名な「六十点主義」は、このような彼の政治姿勢を端的に示すものである。

しかし他方では、国の基本方針を左右するような重要問題について無原則な妥協をすることは、あくまで拒否するという立場を、大平は常に堅持していた。三木内閣が野党との協調を強調し、選挙法や政治資金法、独占禁止法などについて野党の要求を容れ、大平の目からはあまりに「性急」に改革を急ごうとしたとき、それを批判して、次のように述べている。「三木首相は（野党と対話と協調をすることを強調される。しかし、それは当たり前のことじゃないか。与野党が（議席の上で）接近したから、対話と協調を急がなければならぬというふうなことは、あまり真面目な態度だとはいえない。（……）（……）本当は与党が強いときこそ対話と協調をやらなければいけないのであつて、それでこそ民主政治は成り立つ。そつ

う民主政治の基本があれば、改革が接近してきても、動ずることはない。便宜主義に流れないようにしてもらいたい⁽⁵²⁾。みずからが内閣を組織し、政策遂行の必要上「部分連合」を唱、えた際も、大平は原則にかかわる点については、党内多数の意見を押し切つてでも妥協に反対した。一九七九年度の予算案の国会通過に際し、中道政党が予算書の形式修正を強く主張し、国会対策委員会関係者を中心に自民党首脳部もそれを受け入れる方向に傾いたとき、大平は熟慮のうえ、それを拒否することを決断した。その理由について、彼は次のように説明している。「中道政党とは」個別の政策について立場を共通にすることがあつたが、予算案というのは一年間の政府の政策全体を規定するものであるので、慎重に対応しなければならぬと思う。修正に応じて、自民党と公明、民社が同じ立場をとるといふことは、政策全体について合意し、これで行きましようとして協定することになる。もし、今年これをやれば来年もまたといふことになるし、予算編成から一緒にやることになる。これは部分連合を大きく踏み越え、連立政権につながることは目に見えている。この提案を呑むことは、民社党や公明党に対して、自民党に過大な期待を抱かせることになる。いま自民党には、公・民両党に閣僚のポストを割いてやるコンセンサスもないし、公明、民社との関係もそこまで熟してきてはいない。もう少しコミュニケーションを重ね、その上で関係を深めるかどうかを判断する必要があるのではないか⁽⁵³⁾。その結果、この年の予算案は衆議院の予算委員会では否決、本会議で可決といふきわどい経過をとつて成立したのである。

同年一〇月の第三十五回衆議院総選挙で、自民党が公認候補の当選者で前回よりも一議席減らし、過半数に達しなかつた際、自民党内に大平辞任を求める運動が高まり、いわゆる「四〇日抗争」と呼ばれる苛酷な権力闘争が展開された。マスメディアの論調も、大平首相の責任を追及し、その辞任を求める声が支配的であつた。しかし大平は、頑として退陣を拒否した。それは公認候補の当選者数において前回よりも一議席減らしたとはいえ、自民党は他の政党を断然引き離す第一党であり、かつ当選後の入党者を加え

は過半数を占めている以上、議会制民主主義の原則から見て、総理大臣を辞任することはおかしい、また自民党総裁の進退は、党の正式の意思決定機関（党大会ないし両院議員総会）で決められるべきである、と大平が判断していたからである。反大平派は、国会議員数において少数派であったから、両院議員総会の開催を拒否していた。しかし大平の目から見れば、これは党の正規の手続きを無視するものと思われたのである。大平の気持ちはよく判る、しかし辞任を拒否するような態度は「日本人の美意識に合わない」という、知人の忠告にも、大平は耳をかそうとはしなかった。大平は争いを好まない性格の持ち主といわれており、事実すでに述べたように他者にたいしてきわめて寛容であった。しかし原則がかかっている場合には、大平の態度は頑固なまでに非妥協的であった。例の座右ノートには、ラ・フォンテーヌの「邪悪の者には絶えず戦いをすることだ。平和そのものは甚だよろしい。私も賛成だ。しかしそれが何になろうか。信義を護らぬ敵に対し」という言葉も書かれていたのである。⁽⁵⁵⁾ 田中内閣の外相として、日中国交正常化という難題と取り組んだ大平は、自民党内台湾擁護派の激しい非難攻撃に対して、一歩も退かなかった。交渉のため北京に出発する際、大平は信頼する秘書に「この交渉によって、どんな危険があるかも知れない。留守中のことはよろしく頼む」と語った。⁽⁵⁶⁾ やるべきだと確信した場合、大平は、断固としており、徹底して非妥協的だったのである。

このように大平の政治手法は、妥協・協調と原則の堅持という矛盾をはらんだ二つの方針の微妙な均衡によって構成されていた。それは野党、とりわけ第一野党である社会党が原理的反対党の立場を捨てず、したがって与野党間の建設的な論争や政権交代が事実として不可能な状況のもとで、政治を運営し、民主主義を成熟させていかなければならないという、元来矛盾した現実の要請に対応したものであり、現実を直視する保守主義者大平正芳にまさにふさわしいものであった。しかし、それは大平について、一方では「ハト派」「協調主義者」、他方では「権力主義者」という矛盾する評価を世上に流布させ、大平政治を理

解しにくいものとする結果をもたらすことにもなったのである。首相として大平正芳は、世論受けのする指導者では決してなかった。

人間は本質的に不完全なものであり、歴史には「最終的解決なるものはない」と確信していた大平は、しかし国民の良識が最終的には正しい選択を行うという信念を持っていた。大平は、朝比奈宗源管長との対談で、「時にはがゆいと思われることがあっても、終極においては私は日本人を信頼しているのです」と語っている。歴史の中に蓄積された叡知に信頼するという先進国型の保守主義を本格的には採りえない大平にとって、その最終的な拠り所は、全体的・長期的には良識が日本社会の大勢を占めるという、国民にたいする信頼であった。一九七九年の総選挙において、「洋の東西を問わず、かつて増税を掲げて選挙に勝った例はない」という側近の忠告を退け、「国民は必ず、大幅な歳出削減をしなければ増税が必要になることをわかってくれる」と信じた大平は、一般消費税の導入をあえて公約に掲げた。しかしその結果は、台風の来襲という特別な事情があったにせよ、大平の期待を無残に裏切るものであった。そして、この選挙における挫折が、激しい党内抗争を誘発し、翌年五月における内閣不信任決議案の可決と、解散・総選挙をもたらし、それが大平の急死につながったのである。この大平の政治的挫折にも、日本において真正な保守思想を構築することがいかに困難であるかが、よく示されている。

首相在任中、大平は一日の仕事を終えて家の玄関をまたぐとき、「つまらんなあ。毎日毎日こんなことをして」とつぶやくのが常であったという。⁵⁹現代日本において、稀に見る本格的な保守思想の持ち主であった大平正芳にとって、日本の政治の現実とは、とりわけ与野党対立と党内抗争に明け暮れる日々は、耐え忍ぶにはあまりに苛酷なものだったのである。このつぶやきは、大平の政治家としての弱さを示すものであるとともに、人間としての限りない魅力を現してもいるのである。

- (1) カール・マンハイム著『歴史主義／保守主義』（森博訳）、恒星社厚生閣、七九八頁
- (2) 思想としての保守主義と急進主義の的確な解説については、村上泰亮著『反古典の政治経済学』上巻、中央公論社、一二二頁以下参照
- (3) 中曾根康弘他著『共同研究「冷戦以後」』、文藝春秋、第七章参照
- (4) 森田一著『最後の旅』、行政問題研究所、一四二頁
- (5) 大平正芳著『素顔の代議士』、二〇世紀社、一四〇頁
- (6) 大平正芳・田中洋之助著『複合力の時代』、ライフ社、三三三頁
- (7) 大平正芳著『旦暮芥考』、鹿島研究所出版会、二八七頁
- (8) 大平正芳著『風塵雑俎』、鹿島出版会、二〇八頁
- (9) 大平正芳著『財政つれづれ草』、如水書房、二二九頁
- (10) 『素顔の代議士』、一四〇～一四二頁
- (11) 『旦暮芥考』、一七五頁
- (12) 栗原祐幸著『大平元総理と私』、廣済堂出版、一九七頁
- (13) 『素顔の代議士』、一五〇～一五一頁
- (14) 大平正芳著『私の履歴書』、日本経済新聞社、一八八～一八九頁
- (15) 『財政つれづれ草』、八五～八六頁
- (16) 前掲書、四一頁
- (17) 『素顔の代議士』、八九～九二頁
- (18) 『私の履歴書』、一五九～一六二頁
- (19) 『旦暮芥考』、二二六頁

- (20) 前掲書、一四二頁
- (21) 『複合力の時代』、二六頁
- (22) 『私の履歴書』、一六 一七頁
- (23) 『素顔の代議士』、八二 八三頁
- (24) 『財政つれづれ草』、一六四頁
- (25) 『素顔の代議士』、二〇八頁
- (26) 『私の履歴書』、一六三頁
- (27) 『素顔の代議士』、一七七頁
- (27) 前掲書、九 一〇頁
- (29) 『財政つれづれ草』、三二 三三頁
- (30) 『私の履歴書』、四六頁
- (31) 『財政つれづれ草』、三三三頁
- (32) 前掲書、六〇頁
- (33) 『素顔の代議士』、一七九頁
- (34) 『財政つれづれ草』、九〇 九三頁
- (35) 前掲書、八六頁
- (36) 前掲書、八八 八九頁
- (37) 前掲書、八七頁
- (38) 『私の履歴書』、一四七 一四八頁
- (39) 前掲書、一四九 一五〇頁

大平正芳の政治姿勢

- (40) 『旦暮芥考』、二八八～二八九頁
- (41) 『財政つれづれ草』、九一頁
- (42) 『旦暮芥考』、一八七～一八八頁、二九三頁
- (43) 『風塵雜俎』、三〇三頁
- (44) 『旦暮芥考』、二九丁～二九三頁
- (45) 『最後の旅』、一三八～一四〇頁
- (46) 『素顔の代議士』、八七～八八頁
- (47) 長富祐一郎著『近代を超えて』上巻、大蔵財務協会、三九四頁
- (48) 『素顔の代議士』、一九七頁
- (49) 前掲書、一九九頁
- (50) 『最後の旅』、一三〇頁
- (51) 『風塵雜俎』、二三六～二三七頁 なお田中六助著『大平正芳の人と政治』、朝日ソノラマ、一〇三頁も参照
- (52) 『風塵雜俎』、三〇六～三〇七頁
- (53) 公文俊平他監修『大平正芳 人と思想』大平正芳記念財団、四七〇頁 なお『大平正芳の人と政治』九四 九五頁も参照
- (54) 『近代を超えて』上巻、二七四頁
- (55) 『最後の旅』、一一〇頁
- (56) 真鍋賢二著『私の見た大平正芳』イメージメイカーズ、一五丁～一五四頁
- (57) 『近代を超えて』上巻、二七三頁
- (58) 前掲書、上巻、二七三頁
- (59) 新井俊三、森田一著『文人宰相 大平正芳』、春秋社、三二二頁